



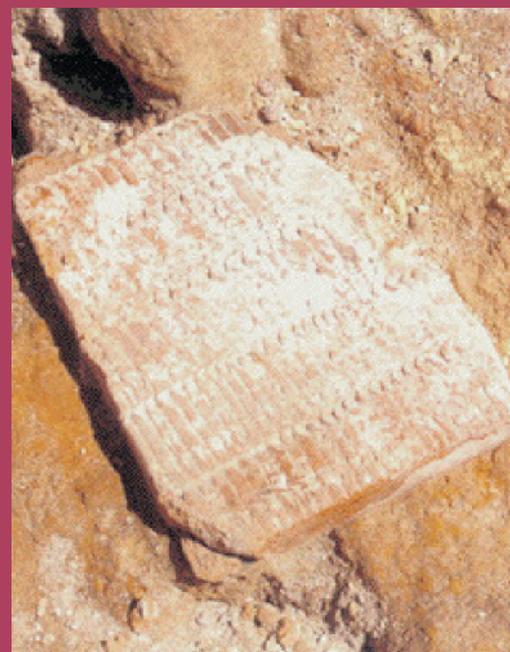
Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 5

2007年1月号



目 次

イラン・ボラギ溪谷遺跡の調査に参加して(2)	大沼克彦	1
印章と都市化の関係	石田恵子	5
テル・タバンの粘土板文書が出土した土器窯	沼本宏俊	11
銅石器時代土器の調査記		
- ユーフラテス川水系の技術拡散 -	小泉龍人	18

表紙

A
B | C

A : 甕とともに出土した粘土板文書(シリア、テル・タバン遺跡)
B : 甕の内部から出土した粘土板文書(シリア、テル・タバン遺跡)
C : 出土した粘土板文書(シリア、テル・タバン遺跡)

イラン・ボラギ渓谷遺跡の調査に参加して（２）

大沼克彦（国土舘大学イラク古代文化研究所）

計画研究「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」研究分担者

平成18年7月13日から8月10日にかけて実施されたボラギ渓谷遺跡の第2次調査に筆者は参加した。ボラギ渓谷遺跡はイラン・イスラム共和国ファルス県のシヴァンド川流域に立地する。

筆者は昨年、このNewsletterのNo.2（大沼 2006：1-4）において、第1次調査で出土した石器群の概要を述べ、周辺地域石器群との比較を通して、それらの年代的な位置づけを試みた。

平成18年の第2次調査は、第1次調査で発掘された地点75直近の洞穴の内部でおこなわれた（写真1）。なお、この洞穴は地元住民によりハッジ・バハラミ洞穴と呼ばれている。

第2次調査で出土した石器の総数はトレンチCの504点（破損のない完形資料233点）、トレンチDの4,731点（完形資料2,439点）の都合5,235点である。それらは、第1次調査出土の石器と同様に、濃茶色、緑色、黄色などのチャート質フリントを素材にしてつくられている。

トレンチCとトレンチDの6層から3層（6層が下位層、3層が上位層）の層序の内訳と出土石器の詳細な特徴に関しては近日中に刊行される報告書にゆずるとして、本稿では、出土石器の技術・型態的な概要を述べ、Newsletter No.2で提起した年代的な位置づけ（大沼 2006：表1）をふ



写真1 ボラギ渓谷遺跡地点75洞穴（ハッジ・バハラミ洞穴）（筆者撮影）

まえた新たな編年を試みる。

第2次調査で出土した石器は、デビタージュ、石核修正剥片、チップあるいは二次加工剥片、二次加工石器、石核を内訳とする。これらは、第1次調査の石器と同様に極めて小形である。

デビタージュ（石核剥離の産物としての意図的剥片）は、原皮剥片、部分的原皮剥片、原皮なし剥片から構成され、原皮なし剥片は更に剥片、石刃、細石刃に分けられる。

石核修正剥片は、打面、石核底部、石核剥離面を除去したり、打面を転移したりして石核を再整形したときに剥がされた剥片である。

チップ（意図せずに剥がされた剥片）と二次加工剥片（二次加工の際に生じた剥片）の両者を識別することは、接合によらない限り困難である。二次加工剥片とは彫器刃部剥片（ビュラン・スポール）やエンド・スクレイパー刃部再生剥片などである。幾何学形細石器をつくるためのマイクロ・ビュラン技法で生じるマイクロ・ビュランはまったくみられない。

二次加工石器にはサイド・スクレイパー、エンド・スクレイパー、円形スクレイパー、鋸歯縁石器、ノッチ、親指爪状スクレイパーなどがある。幾何学形細石器はわずか1点だけみられるが、極めて小形の背潰し細石刃やサイド・スクレイパーなど、非幾何学形細石器が存在する。

細石刃石核は円錐形、円筒形、角錐形を呈していて、概して精巧な剥離の痕を残している。

栽培穀物を伐採する際に付着した艶のみられる石器は皆無である。

6層から3層の約2,700点の完形石器の分析は、現在、以下のような技術・形態的特徴を明らかにしつつある。

技術的特徴（細石刃の剥離方法）：

6層から3層にかけて、細石刃の剥離方法は断絶せずに、連続的に発展する。

6層と5層においては、細石刃は石刃剥離工程の一環として、その後半工程で、小形の石刃として剥離されている。

4層では石刃剥離と細石刃剥離における差異が出現する。4層のある時点で、ハッジ・バハラミ洞穴の住民は、石刃剥離に用いた素材石を細石刃剥離の開始に適した大きさに分割して、細石刃を押圧で剥離することを試みだす。しかしながら、この試みは、押圧に不向きな石質の故、しばしば失敗に終わっている。これとほぼ時を同じくして、住民は近隣のどこかで細石刃の押圧剥離に好適な素材石を採取し始める。この時点を境に4層は二分され、下位を5層の特徴を強く残すもの、上位を3層に近づくものとするができるようである。

3層では、石刃剥離と細石刃剥離が素材石と剥離方法の2点で全く異なっている。石刃は素材石の質にかかわらず打撃で剥離されている。一方、細石刃はガラス質で均質な良質石材を用いて押圧で入念に剥離されている。

形態的特徴（石器道具器種の頻度）：

出現頻度における層間の差異はあるものの、一貫してみられる石器道具器種はサイド・スクレイパー、エンド・スクレイパー、親指爪状スクレイパー、鋸歯縁石器、ノッチ、そして、背潰し細石刃などの非幾何学形細石器である。

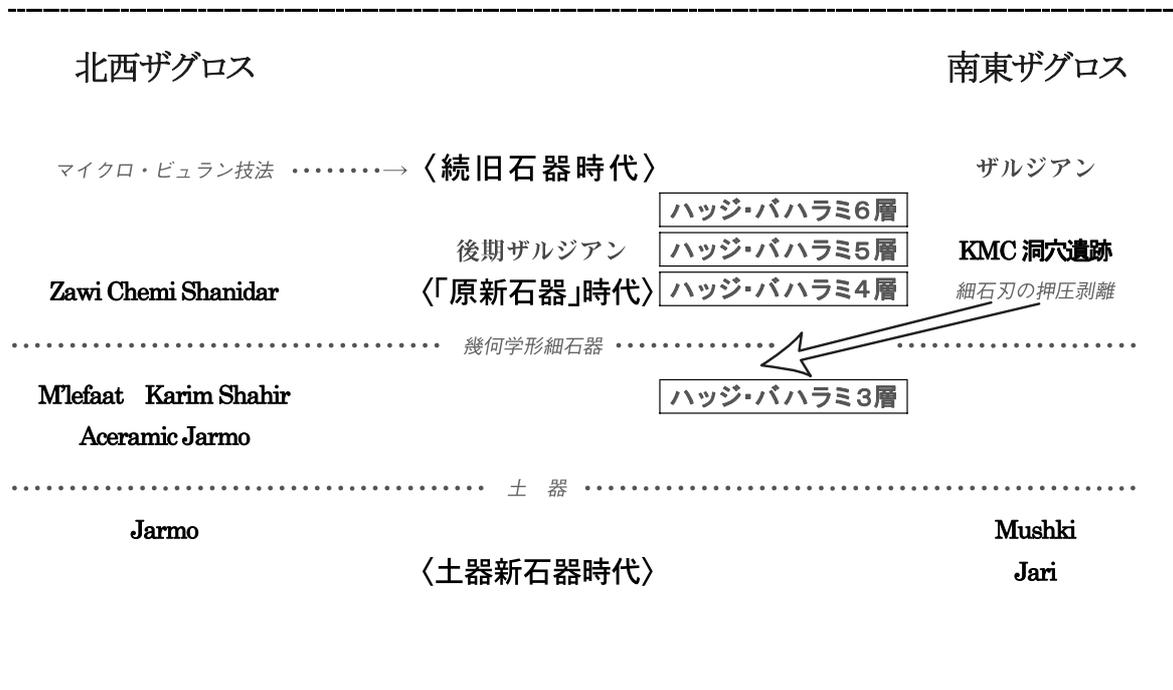


図1 ザグロス山麓の続旧石器時代から「原新石器」時代にかけての年代的枠組みにおけるボラギ渓谷ハッジ・バハラミ洞穴遺跡6層-3層石器群の仮説的位置づけ

以上の技術・型態的特徴は、6層から3層の石器が、全体的に観て、西イラン地方のワルワシ岩陰遺跡 (Olszewski 1993) に代表されるザグロス山麓の続旧石器・ザルジアンの特徴を残しつつ、同時に、同地の「原新石器」(Mellaart 1965 : 18) 石器群の特徴を有していることを示している。層毎に言うならば、6層と5層を南東ザグロスのマルヴダシュト近くのKMC洞穴遺跡出土の後期続旧石器(後期ザルジアン)(Rosenberg 2003)に対比することができ、4層を北西ザグロスのザヴィ・チェミ・シャニダール遺跡(Solecki 1981)の石器に、そして、3層を北西ザグロスのカリム・シャヒル(Howe 1983)、ムレファート(Dittemore 1983)両遺跡の「原新石器」石器群に対比することができる(図1)。

すでに精巧な細石刃押圧剥離を有している4層を押圧細石刃剥離が存在していなかったザヴィ・チェミ・シャニダール遺跡と同時期とすることは、この剥離法がザグロス地帯では西方よりも東方で早く出現したと考えることで可能になる。

謝辞

筑波大学大学院人文社会科学研究所の常木晃教授には、ボラギ渓谷遺跡の最終報告書の刊行されていない状況で、本論の作成と公表に関して配慮をたまわりました。ここに御礼申し上げます。ザグロス山麓の続旧石器に関する広範な教示をたまわったペンシルヴァニア大学博物館のデボラ・オルゼウスキー博士に御礼申し上げます。

参考文献

Dittemore, M.

1983 The Soundings at M'lefaat, *Prehistoric Archeology along the Zagros Flanks*, edited by L.S. Braidwood, R.J. Braidwood, B. Howe, C.A. Reed and P.J. Watson, Vol.105 of the University of Chicago Oriental Institute Publications, Chicago, pp.671-692.

Howe, B.

1983 Karim Shahir, *Prehistoric Archeology along the Zagros Flanks*, edited by L.S. Braidwood, R.J. Braidwood, B. Howe, C.A. Reed and P.J. Watson, Vol.105 of the University of Chicago Oriental Institute Publications, Chicago, pp.23-154.

Mellaart, J.

1965 *Earliest Civilizations of the Near East*, Thames and Hudson, London.

大沼克彦

2006 「イラン・ボラギ溪谷遺跡の調査に参加して」『セム系部族社会の形成 Newsletter』No.2, 1-4頁.

Olszewski, D. I.

1993 The Zarzian Occupation at Warwasi Rockshelter, Iran, *The Paleolithic Prehistory of the Zagros-Taurus*, edited by D.I. Olszewski and H.L. Dibble, Monograph 83 of the University Museum, University of Pennsylvania, Pennsylvania, pp.207-236.

Rosenberg, M.

2003 The Epipalaeolithic in the Marv Dasht, *Yeki Bud, Yeki Nabud, Essays on the Archaeology of Iran*, edited by N. F. Miller and K. Abdi, the Cotsen Insititute of Archaeology, University of California, Los Angeles.

Solecki, R.L.

1981 *An Early Village Site at Zawi Chemi Shanidar*, Bibliotheca Mesopotamica Vol.13, Undena Publications, Malib.

印章と都市化の関係

石田恵子 (古代オリエント博物館)

計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」研究分担者

現在の印章とは

現在のカード化の進んだ社会でも、印章は印鑑やハンコと呼ばれ、われわれの生活にはまだ不可欠な存在である。我々一般庶民ですら複数の印鑑を持って、銀行によって使い分けたりする。契約書では必ず印鑑が求められ、住宅など高額な買い物や借金をする場合には役所に届け出た実印の使用が求められる。以上のような事実から推測されるように、印章はお金、つまり財産と密接な関わりがある。大きな権限を持つ者ほど立派な印章を持ち、日々の暮らしもおぼつかない人々には印章は無縁なものであった。日本での印章は中国伝来の文字を彫った印章であり、朱肉などをつけて紙に捺す印章である。

財産とは

古代において財産とは何であろうか。旧石器時代では毎日獲物を探して暮らし、獲物がとれば食べられる、獲物のない日は食べ物にありつけないという生活であったことだろう。そのときの財産といえば、干し肉や木の実などの保存のきく食べ物や獲った動物の毛皮、革、牙や角、必需品としての石器や石材、装身具としての貝や石などであったと思われる。

やがて農耕・牧畜が始まった新石器時代になると、保存のきく穀物も財産となり、物々交換で彼らの欲しい特別な物も手に入れた。そのような威信材の一例として黒曜石があり、黒曜石からは石器はもちろん鏡やビーズまで作られ、美しくかつ実用的な石器材料として珍重された。また石器として一般的なフリントもどこにでもあるわけではなかった。加工品としての石器自体が商品として流通していたこともおおいに考えられる。

アラバスターや大理石、水晶やメノウ、ラピスラズリなどの美しい石材は、石製容器やビーズなどに加工され、原料はたいてい西アジアの外から輸入しなければならなかった。原料自体も加工品も商品となった。流通の問題は文明と大きく関わってくる。

流通

物資の流通は商業の始まりでもある。通常、行商人の存在を想定しがちである。原産地の誰か、あるいは誰かが原産地に仕入れに行き産物売り歩く。あるいは、隣接する地域同士が交換を繰り返して行くと、結果として遠距離を物資が運ばれる可能性はある。物々交換であったはずだが、交換レートは当時の価値次第であった。つまり、需要と供給の関係であるのは今と変わらないはずである。古代における流通や交換の実態がどうだったのかは不明であるが、実際に黒曜石

など産地の同定できる資料については広い流通範囲がすでに研究されており、交通手段が進んでいない先史時代から意外なほど遠方に物資が運ばれる事実が判明している。そのためには徒歩以外の運搬方法も発達していったことだろう。

交通

流通には運ぶ手段として、人（手に上げたり、背負うなどして徒歩）、駄獣（ロバ、オナジャー、牛、馬、駱駝など）の背に乗せ（騎乗した）人が誘導する、さらにソリや車両が発明されると駄獣の引く車両で運ぶ、舟で川や海を運ぶ（大型品や重量物の輸送や大量輸送に適していた）方法などがある。テラコッタ製品などに車両の造形もあるが、その実態を明らかにすることはなかなか難しい。文献記録が残る時代には搬送を生業とする者もいたはずで、その情報を集めることはできるはずである。例えばイラク南部のウル遺跡はユーフラテス川のそばにあって、都市の周囲をめぐる運河を川から引いていた。運河は防衛、農業と水運に役立つ施設であった。

旧石器時代の家産経済

一家族のみで生活している場合の経済には複雑な問題はなかったと思われる。物資の過不足は家族全員の問題であったからである。数家族から成る共同体の経済である場合は事情が違ってくる。数家族の中での家族間のランク付けや獲物獲得への関与の仕方などから、獲物などの分配の仕方に差が生じたりしたかもしれない。おそらくこの場合の数家族は血縁と推定されるので、家族の情があれば破綻をきたすことは少なく、まとめやすかったことだろう。旧石器時代の場合はこのような血縁集団が基本となって移動していたと想定される。

村の成立と新石器時代の家産経済

一方、農耕・牧畜の始まった新石器時代には、いくつもの血縁集団を核とする地縁集団が増幅していったムラを作っていたと想定される。村の中では村長や村役のようなまとめる立場の人々も出来、村の収穫物などの共有財産を管理する役も発生していった。物々交換や交易による売買が行われた段階で新石器時代の印章が登場したと思われる。封印の採用は共同体内部の人々をも信用できなくなったというより、共同体の財産を管理し、物資の再配分をすべて管理していかうとするシステムの成立と見るべきであろう。私有財産がいつ頃から存在したのかは大変難しい問題であるが、文字記録のない時代には証明の方法がない。捺すだけのスタンプ印章で、最初は石に彫るという技術的な問題からも幾何学文であったが、メノウのような非常に堅い石に繊細な幾何学文も登場している。

印章の出現

シリアの新石器時代のテル・エル・ケルク遺跡からは、数種類ものスタンプ印章が登場しており、それもさまざまな形状や図柄のスタンプ印章が出土している。すでにいろいろな目的で使い分けられていたことが推測される。テル・エル・ケルクの場合は発掘者の常木晃氏は都市の萌芽であるとみなしている。その主張点は遺跡の大きさや、80本以上の石刃の一括出土を共同体が使うための社会的貯蔵と呼び、石器製作における素材や技術の選択に見られる専門性や、50点以上出土したスタンプ印章や封泥をはじめ、物資の保存をも考慮した住居構造などすでにかなり進ん

だ段階の農村と見ている。

封泥

印章の使用の最初の段階は粘土に捺す封印であった。壺の口やカゴや包みなどの荷にかけた紐の結び目をおおう粘土に印章を捺せば印影が残り、印影が封泥に残る限り中身の無事が証明された。封泥は焼成されないため遺跡で残存することは稀であったが、火事などに遭うと封泥は焼かれて遺跡で発見されることになる。残された物にはエル・コウム遺跡出土品のように印章がすきまなく押された石膏板もある。この孔のあいた石膏板は封印の用途ではなさそうであるが何らかの役割を果たしていたはずである。

粘土を使用しての封印は印章の基本機能としてその後も長く続いて行く。封泥に捺された印影は封をした人、生産者、管理部局、封の内容物などを示すと考えられる。商品が封泥付きで動いた可能性もあり、新石器時代の封泥で粘土の成分分析も進められつつある。つまり、遺跡で出土した印章は印章を所有して捺す人がその遺跡にいたと考えられるが、封泥の場合は必ずしもその遺跡で封をされたとは限らない。物資の流通を証言する封泥はその遺跡の交易範囲の証言者となりうる。

トークンによる経済管理

また新石器時代からウルク時代までの遺跡からは、小さな粘土製のさまざまな形状の物が出土しており、トークンと呼ばれている。シュマン・ベッセラの研究によれば16類492種のトークンがある。ベッセラはこれらを文字以前に物資の名と数に対応させて経済管理をしていたと考えた。売買や貸し借りの際に数量をメモするために粘土でその形の駒を作っていたのではないかと。一部には何とのちの絵文字と一致する形状の物もあり、トークンから絵文字が発生したというのはなかなか魅力的な説である。しかし、すべてが一致する訳ではないため、文字の成立にトークンも関与したと言うことができよう。絵文字から楔形文字への段階でも文字数はかなり整理されていったという。それ以前の広い地域や時代にわたる地方的な符牒がトークンであったのではなからうか。

スタンプ印章の図柄

このように最初の印章であるスタンプ印章はその後、幾何学文様から動物文様などのモチーフに発展しつつ用途を広げて行ったと考えられる。モチーフ自体の意味も加わっていった、角のある動物の力や魔除けになりそうな怪人や怪物も登場するなど、封泥があることはすなわち中身が無事、つまり盗難から守られたことを意味し、印章に魔除け的な意味が加わって行った。このように印章は封泥に捺印するという役割で発展して行った。さまざまな形状、図柄のスタンプ印章があったが、北シリアでは円筒印章一周分と同じくらいの印面の巨大なスタンプ印章まで登場した。

円筒印章の登場

ようやくここで、ウルク期の円筒印章の登場を待つことになる。円筒印章の登場に関しては石製容器を作った時にくりぬいた芯から作ったのではという説もあるが、なかなかその実態は明ら

かではない。円筒印章になってからの大きな変化は印面がエンドレスになったということである。曲面にも捺すことができ、隙間なく捺すには都合が良かった。スタンプ印章にも必ずあった紐通し孔が円筒形の中心軸を通るようになり、装身具にもできるほど携帯しやすくなった。時代が下がるほど美しい石材でも作られ、宝飾品に近くなっていった。画面を回しながらでないと思渡せないため、彫る図柄の割り付けが難しく、また円筒の表面を固定しながら彫るには高度な技術が必要とされたことだろう。当然訓練された印章職人が携わっていた。のちには楔型文字が銘文として彫られる場合もあり、文字は捺した印影で読めるように裏返しに彫られた。宮廷工房では当然いたはずであるが、印章工房には文字のわかる書記が必ず関与していたと思われる。

最初の円筒印章の登場

円筒印章の初現は、粘土封球（クレイボール）や数量粘土板文書に捺された印影としてであった。粘土封球はトークンを入れた中空のボール状の粘土で、手でつかめる大きさで厚手に割れにくく作られている。トークンを入れて内容物を単に保管するのみならず、トークンを入れたまま出荷証明のように運ばれたと推測される。荷受け人が受け取った商品と粘土封球の中身を見比べてチェックできるシステムと思われる。トークンを入れて発送した人間や場所などをあらかず円筒印章が表面に捺されている。粘土封球の場合は円筒印章を捺された上にトークンを押し付けてあり、中を割らなくても中身のチェックが出来るようになっている例もある。流通における記録や保管の最初の工夫であった。印章が捺された上に押し付けたトークンなどを書き換えようとすると、粘土を水で湿らせれば出来なくはないが、最初に捺した印章の印影まで消えてしまうため、書き換えは無理であった。すぐれたアイデアであった。

粘土板文書の登場

また、数量粘土板については粘土板文書の初現であり、数量を記す前に円筒印章の特性を生かして表面全面に捺し転がし、そこに数字を刻んでいる。しばらくして粘土板が乾燥すれば、刻んだ数量は記録に残った。これも書き換えようとして湿らせると印影も消えるという理由により書き換えられなかった。この数量は売買や貸し借り、奉納などの記録であったと思われる。粘土封球も数量粘土板文書もほぼ同時期に存在したが、こちらは経済文書の初現と言える。ただし、これらに捺した円筒印章自体はほとんど見つかっていない。彫りの深い伸びやかな図柄が多かったが、素材が木のような残存しない物であったと考えられている。まだ文字がない時代に円筒印章を利用して、捺印後に記号を刻めば後で書き換えられないシステムを利用した文書を生み出したのである。粘土の板に書いて乾けば記録として残るシステムは古代オリエントの文書として、その後圧倒的な一時代を画することになる。

古代オリエントではこのような経済記録の必要から印章が生まれ、文字が考案されていった（図1）。最初は絵文字、そして楔形文字へと発展し、粘土に文字を記すことで単に経済記録のみならず知恵の蓄積も行われて行ったのである。粘土板文書には今日の署名のように印章を捺すようになり、売買や貸借の当事者や証人として捺すことが行われた。訴訟において必要なメンバーが捺印しており、当事者同士よりも証人の証言の方が効力はあったようである。また、時代によっ

ては文書が封筒に入れられて封筒上に円筒印章が見事に転がされた例もある。予め粘土板文書に印章を全面に転がさずに文字を書くようになったため、ハムラビ法典にあるように水で湿らせて書き変えてはならない、などの条文が作られている。そうやって書き変える輩がいたのであろう。封筒は中身の文書に手を加えられないための工夫で、表に印章が転がされているのは、誰の証書かが判別しやすいためであったろう。ウル第3王朝時代には粘土板文書に書き記した後、円筒印章を全面に捺した例があり、解読者が困るほどであった。これも書き換え防止のためであったのだろう。

円筒印章の図柄

このようなきわめて実利的で事務的な経済システムに印章は常に関わってきた。印章の図柄には当然闘争文や謁見図など図柄の意味もあったが、図柄には時代や地域ごとのグループがあり、様式などと呼ばれてきている。ある様式の分布範囲は共通の価値観をもつ領域であり、ある国や勢力の支配下にあるともいえよう。ただ、同じ地域、時代で似たモチーフの印章ばかりを何のために使ったのかが別の疑問点として浮かんでくる。また、同じ時代や地域でも数種類の図柄がある場合もあり、個々の出土例から遺跡ごとのケース・スタディを行う必要がある。

印章も素材によっては朽ち果てて出土しないが、基本的に印章自体はその遺跡で使用したもので、粘土板文書もその遺跡に当事者がおり保管されたと思われる。封泥は運ばれてきた可能性があり、遺跡に固有の物とは限らないことを念頭におく必要がある。ただし、封泥はどの遺跡でも容器の蓋として必要なものであり、サビ・アビヤドで判明したように捺印されない封泥もあった。

歴史時代の都市

都市とは行政と財政とを管轄し、複雑な経済システムを持つ。そのためには粘土板文書が記録として使われる必要がある。そして印章が多種類あるいは量的に多く使用される必要がある。封泥も条件が整えば大量に出土したはずであるが、条件が揃うことは少なかった。

さらに粘土板文書からは誰がどのような役割で捺印しているかでより詳細な情報を得ることが出来る。公印と私印の区別があり、公印にはレターヘッドのように捺された王家の印章もある。個人間の契約書も契約者すべてが捺印するわけではなく、また複数の証人が捺している事実もあって訴訟に関する情報も入手することが出来る。

歴史時代の農村

歴史時代に入って中心的な都市はもちろんあったが、都市の周辺には衛生都市や町、農産物を供給する村などがあったことだろう。印章を多用していたかもしれないが、果たして常に農業や牧畜に従事する人々まで文書に記録保存していただろうか。私がかつて発掘に参加したユーフラテス川沿いの中期青銅器時代から初期鉄器時代のテル・ルメイラの例をあげると、発掘面積の問題もあるが円筒印章が一点のみ出土した。粘土板文書も印影付きの封泥もなく、スタンプ印章の姿もなかった。一方、地中海寄りの同じく初期鉄器時代のテル・マストゥーマの発掘では、円筒印章2点にスタンプ印章が多数出土した。

テル・ルメイラは地味な農村と考えられ、村に果たして書記がいたかどうかと思えるほどであ

る。地中海寄りのテル・マストゥーマの方がオリーブやぶどう酒などの商品作物を生産していたと思われ、経済活動は活発であったと推定される。

都市と印章

このように印章には新石器時代からの長い歴史があるが「封印」を基本概念として経済システムの実際的なプロセスに関与してきた。また、公印、王印として政治的な文書に効力を与え、真正であるとの証明ともなっている。公印・役職印を所有する者は、中国の官位制度や朝貢関係に伴う「印綬を賜う」という権威を象徴する概念に通じ、印章の重みは古今東西に共通するものである。

円筒印章以後

粘土板文書に楔形文字が書かれなくなり、羊皮紙などに筆で書かれるようになると再びスタンプ印章が封泥に使われるようになり、指輪形印章が使われるようになっていった。旧約聖書においては、身分を証明するもの、権威を示すもの、美しい石に大切な語句が「刻印されたもの」、いつも身につける大切な物、そして封印するものとして登場する。粘土板文書に捺されなくなって以後、小さな封泥に捺される形でしか印影は目にされなくなり、「捺す」というより指輪自体が権威を表す物となって行ったと思われる。このように、時代により印章は多様な役割を演じながら西アジアから広がっていった。

都市化過程の研究

新石器時代の段階から「都市」的な遺跡もあれば、歴史時代における「都市」はその地域の核となる中心地にあり、「都市」的ではない集落も多かったと思われる。「西アジアにおける都市化過程の研究」において、文献学との共同作業により、地域や時代による「都市」概念の発展に新たな成果が生まれることを期待している。

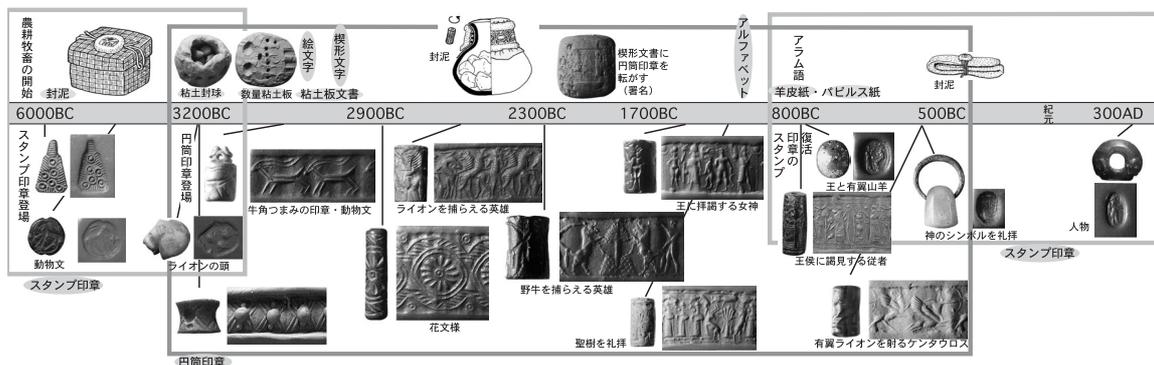


図1 印章の変遷

テル・タバンの粘土板文書が出土した土器窯

沼本宏俊（国土舘大学体育学部）

計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」研究代表者

本計画研究では、研究遂行の一環としてテル・タバンの発掘調査を2005年度から実施している（図1）。テル・タバ（約300×350m、高さ約25m）は、シリア北東部のハッサケ市の南約30km、ユーフラテス川の支流、ハブール川の中流域にある。同遺跡は古バビロニア時代（前19-18世紀頃）のマリ文書や中期・新アッシリア時代（前13～11世紀頃・前9-7世紀頃）の首都アッシュールやニネヴェ出土の文書に登場する同流域の統轄拠点として繁栄した古代都市“タバトゥム/タベトゥ”に古くから比定されている遺跡でもある。タバでは1997年の調査で、古バビロニア時代から新アッシリア時代（前2～1千年紀）にかけての連続した層序が確認されており、本研究を遂行するうえで最適の遺跡である。

2005年の冬季調査では中期アッシリア時代の王宮跡の文書保管庫から大量の中期アッシリア時代（前13～12世紀）の粘土板文書が出土し、日本の調査隊初の大規模な粘土板文書の発見と日本人の手による初の本格的な解読の始まりとして、研究成果が国内外で注目されている（沼本2006a,b；柴田・山田 2006；山田・柴田 2007）。さらに、同年の夏季調査と2006年度の調査



図1 テル・タバ（西側発掘区）



図2 発掘した土器窯（2005年）

では、古バビロニア時代（前18世紀後半頃）の生活層と粘土板文書が発見され、タバンは同時代から既にハブール川中流域の要衝であったことが明らかになった。2005、2006年度の調査成果は、未だ不明瞭な北メソポタミアの前二千年紀の実体を解明するうえで有効な新資料になるのは確実である。

2005、2006年の調査で特筆すべきは、土器窯を発掘し計24点の古バビロニア時代の粘土板文書が出土したことである（沼本 2007、2006a,b）。ハブール川中・下流域の発掘調査で、古バビロニア時代の粘土板文書が発見されたのは、これが最初で欧米調査隊はその記述内容に注目している。粘土板文書が土器窯から出土した発掘例もなく貴重な資料であるといえ、土器窯と粘土板文書の出土状況について簡単に報告したい。

粘土板文書が出土した土器窯

2005年夏、遺跡の西側侵食部の崖セクション直下で確認した焼土堆積層を発掘した結果、土器焼き窯の一部を検出した（図1, 2）。2006年の調査で窯は方形で東西3m、南北2mであることが判明した。窯壁は日干煉瓦造で厚さ約60～80cm、残高は最も良好な部分で約1mを測るが、北壁と南壁の東半は上層からの掘り込みで破壊されており残存しない（図2、7, 10）。西壁に幅約60cmの焚口があり、2005年夏季調査では焚き口部付近の窯内のガチガチに焼けクリーム色、ピンク色をした窯壁の崩れの中から10点の焼成された粘土板文書が出土した。これらの粘土板文書のうち3点は、幅17cmの大型語彙文書（初級文字表）の破片で（柴田・山田 2006）、1点は良く焼けており保存状態は良いが（図3, 4）、他の2点は脆弱で遺存状態は非常に悪い。これらの3点は同一個体で

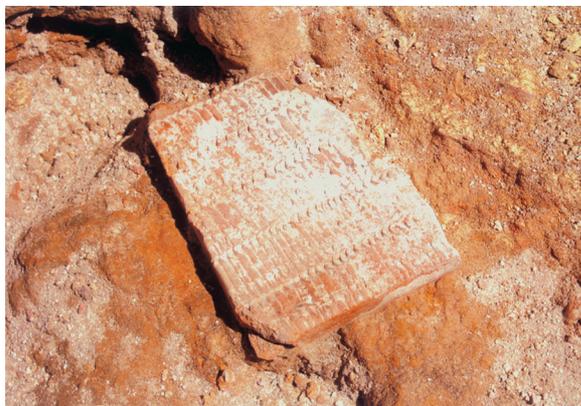


図3 出土した粘土板文書

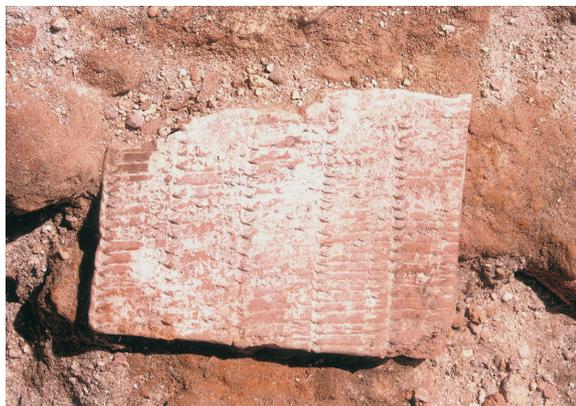


図4 出土した粘土板文書



図5 甕とともに出土した粘土板文書



図6 甕の内部から出土した粘土板文書

あった可能性が強い。7点は小型（7～4cm角）の完形品であった。最も注目すべきは、7点の粘土板文書は壊れた広口の甕とともに出土しており（図5、6）5点は甕の内部に納められた状態で出土した（図6）。恐らく重要文書を長期保管する目的で甕の中に入れ焼成したと思われる。解読結果、これらの文書には古バビロニアの楔形文字が刻まれ前18世紀後半頃に年代付けられ、7点の粘土板文書のうち4点は書簡であったことが明らかになった（柴田・山田 2006）。

2006年夏も同窯の継続調査を行い、埋積土から計14点の粘土板文書が出土した（図7～12）。これらの中で最も注目すべきは、封筒入り粘土板文書で、前年度に掘り残していた北壁部の長さ約1m、幅約60cm、厚さ約70cmのガチガチに焼けた窯壁の崩れの堆積から出土した。粘土板文書は完形（長さ11.5cm、幅6cm、厚さ約2cm）で、壊れた粘土製の封筒に半分ほど入った状態で出土した（図8）。文書、封筒ともに良く焼成されており明褐色を呈していた。封筒は復元の結果、全体の約3/4が残存し、長さ約13cm、幅約7cmで、裏面には文字は刻まれていない。粘土板の包み方と製作工程が良くわかる類例のない貴重な資料である（図9）。この封筒入り粘土板文書の直下からは、大型広口甕の約1/3破片が出土したことから（図7）、この粘土板も前年度出土した粘土板文書群と同様に、甕に収め長期間保管するために焼成されたと考えられる。この封筒入り粘土板文書の発見は、2006年12月7日の朝日新聞朝刊文化面に写真入りで掲載された。この粘土板文書の解読は筑波大学の山田重郎氏により行われ、文書はユーフラテス川流域にあるテルカの王が、タバンの領主に宛てた土地や家屋を下賜する契約が記された書簡であることがわかった。他の粘土板文書は7cm角以下で、7点は窯の中央部から奥壁（東壁）よりの床面上に堆積した焼土の約30×20cmの



図7 発掘した土器窯と出土した粘土板文書（2006年）

範囲にまとまって出土しており（図10, 11, 12）この一群も甕もしくは籠に入れられ焼成された可能性を示唆している。解読にあたった同氏によれば、これらの文書は前年度の文書と同じ古バビロニア時代後半のもので、大半が書簡であることがわかった。解読も徐々に進んでおり記述内容も明らかになりつつある（山田・柴田 2007）。

窯の床面からは小型土器、テラコッタ製女性裸婦像、ブロンズ製リング・槍先、土製ビーズ、坩堝、砥石、白石、埋甕等が出土した。こうした証拠から窯は最初、小部屋として利用され、後に土器窯に改造されたと推測される。土器窯の北東部を拡張し発掘したところ、窯の西壁は北側の石膏容器が据え付けられ、灰が堆積した床をもつ部屋に連続していたことから、この一帯は同時代の工房区であったことを示唆している。



図8 出土した封筒入り粘土板文書

研究成果と意義

粘土板文書の多くは書簡で、中には年月日が記載された文書も認められることから（山田・柴田 2007）土器窯から出土した同時代の各種土器の精確な年代を提示することが可能になった。したがって、タバンは

中期アッシリア時代のみならず、古バビロニア時代の編年構築や土器研究の際の標準遺跡になるは確実である。窯と同時代の生活層はテルの北側の1997, 8年に発掘したトレンチや西側浸食部の全てのトレンチで認められ、中期アッシリア時代の占住域よりも広範囲に及んでいたことが明らかになった。

これまでの研究では前18後半～17世紀のハブール川流域が、一体どこの勢力下にあったのか全く判然としなかったが、上述の封筒入り文書の記述からタバンの所在するハブール川中流域は、南のユーフラテス川流域のテルカの配下にあったことが明らかになった。闇の時代の解明に向けて、新事実と新資料を提供することができたという点で、画期的な調査成果であることを特筆したい。さらに、土器窯出土の粘土板文書

の解読成果から（山田・柴田 2007）、テル・タバンは古バビロニア時代のマリ文書に登場するハブール川中流域の統轄拠点“タバトゥム”であったことを実証した点は、2006年度の調査では最大の成果である。

テル・タバンは、地理的にもセム系民族アムル人の源郷であるピュシュリ山系から北東約120km



図9 封筒入り粘土板文書



図10 発掘した土器窯と出土した粘土板文書（2006年）



図11 出土した粘土板文書群



図12 土器窯から出土した古バビロニア時代の粘土板文書

の地点にあり、両地域は水系こそ異なるが有史以来、同一の文化圏に属し密接に関係している。テル・タバンの調査で発見した中期アッシリア時代と古バビロニア時代の粘土板文書の解読が更に進み、文中にアムル語系の人名、地名等が登場すればアムル人の勢力・移動範囲や拡散過程を

知るうえで大きな手掛かりになる。楔形文字資料の発見と解読成果が、アッシリアと同じセム系民族アムル人の源流と特質を探求するうえで最も有効であることは言うまでもない。こうした面でも本研究計画班の成果は、「セム系部族社会の形成」の研究遂行に大きな貢献を成しつつある。

参考文献

柴田大輔、山田重郎 2006

「2005年テル・タバンの出土楔形文字文書について」『今よみがえる古代オリエント』、第13回西アジア発掘調査報告会報告集：63 - 66 .

沼本宏俊 2005

「シリア、テル・タバンの遺跡」『考古学研究』52 - 2、考古学研究会編：109 - 111 .

沼本宏俊 2006a

「シリア、テル・タバンの遺跡の発掘調査（2005年）」『国史館考古学』第2号：57 - 77 .

沼本宏俊 2006b

「粘土板文書を発見！テル・タバンの遺跡の発掘調査（2005年）」『今よみがえる古代オリエント』、第13回西アジア発掘調査報告会報告集：56 - 62 .

沼本宏俊 2007

「粘土板文書を発見！テル・タバンの遺跡の発掘調査（2006年）」『考古学が語る古代オリエント』、第14回西アジア発掘調査報告会報告集：122 - 127 .

山田重郎、柴田大輔 2007

「2005 / 2006年 シリア、テル・タバンの出土楔形文字文書」『考古学が語る古代オリエント』、第14回西アジア発掘調査報告会報告集：128 - 131 .

銅石器時代土器の調査記

- ユーフラテス川水系の技術拡散 -

小泉龍人（早稲田大学非常勤講師）

計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」研究分担者

資料調査の目的

平成18年3月、筆者は銅石器時代におけるユーフラテス川水系の土器資料を観察調査する目的で、イギリスのケンブリッジ大学およびマンチェスター大学へ出向いた。

筆者が日頃おもに研究しているのは、北シリアからメソポタミア、さらには南西イラン地方にかけて広範に分布するウバイド土器である。この土器を指標とするウバイド文化は、西アジアにおける新石器時代の農耕牧畜社会が複雑化していき、やがて古代都市へと華開く過渡期に位置している。まさにウバイド土器は、集落が都市へと飛翔する過程を考古学的に捉えるのに最適な資料となっている。

かつて筆者は、北シリアのユーフラテス上流域に位置するテル・コサック・シャマリ遺跡の発掘調査に参加した（図1）。同遺跡の調査では、ウバイド期からウルク期にかけての良好な居住堆積が確認されている。銅石器時代の土器を担当する筆者は、床面や床面直上など有意なコンテキストで検出された豊富な土器資料を整理しながら、ユーフラテス川上流域における紀元前5～4千

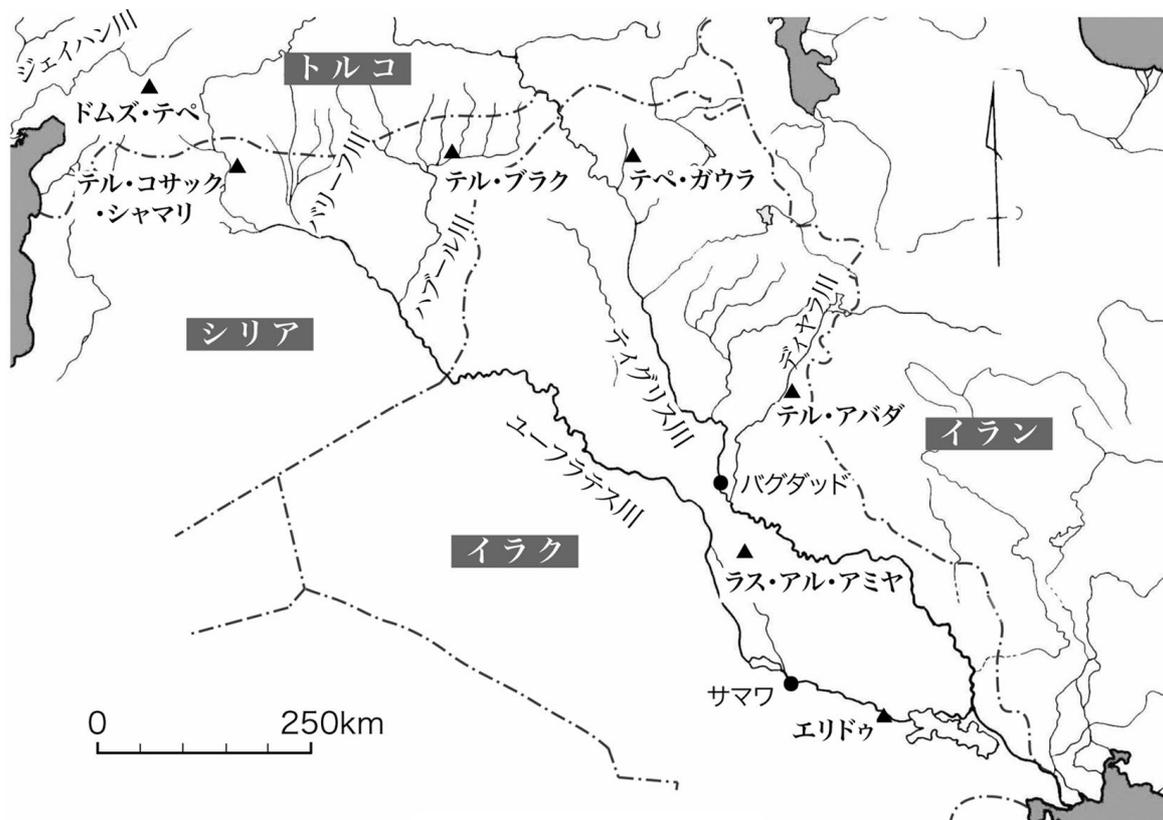


図1 主な遺跡分布図

年紀のウバイド・ウルク土器編年の構築を目指して研究している。現在、本遺跡の発掘調査成果を報告書にまとめるべく整理作業を継続中である。

報告書作成のために、ユーフラテス川上流域周辺の諸水系で出土した類似資料との比較検討が欠かせない。北シリアのバリーフ川やハブール川だけでなく、中部イラクのユーフラテス川中流域も対象とする必要がある。とくに、イラクのラス・アル・アミヤ遺跡は、ユーフラテス水系を動線とするイラク方面からシリア方面への文化拡散を捉える上で重要な位置を占めている。時期的には、南方に誕生したウバイド文化が北方へ拡散し始める頃、すなわちハラフ終末期からウバイド前期初頭に相当する。

ラス・アル・アミヤは、1960年にイギリスのデイヴィッド・ストロナッハ博士によって緊急発掘された。まず筆者は、ストロナッハ博士（カリフォルニア大学）に「遺物をどうしても観察したい」とメールで伝えたところ、すぐに返信を頂戴した。残念なことに、彼が調査したときには遺物のディビジョン（分割貸与）がされておらず、現在イラク国内のどこの博物館に出土資料が保管されているかも分からない、との返事だった。しかも、イラクは現在戦争中のために、発掘資料を手にとって悠長に観察することは叶わず、入国すらできない状態が続いている。

なかば諦めかけていたものの、資料調査そのものを断念するのは口惜しい。そこで、イラク調査の歴史の長いシカゴ大学東洋文化研究所で関連資料を見せてもらうか、それともイギリスのハラフ・ウバイドの研究者に個別に会いに行こうか悩んでいた。当初、筑波大の常木晃先生や東海大の山花京子先生からいろいろとアドバイスを頂戴して、かなりシカゴ行きをイメージしていた。そこへ、国土館大学の松本健先生や小口裕通先生から思わぬ助言をいただいた。「ジョアンのところに行った方がいい。聞くなら今しかない」。

イギリスのジョアン・オーツ博士は、長年に渡ってイラク、イラン、シリアで考古学調査を継続してきたウバイド研究の大御所であり、1960年に雑誌 *Iraq* で発表した “Ur and Eridu, the Prehistory” はウバイド土器編年の出発点となっている。現在のウバイド土器研究は、理化学的分析や社会構造的な考察といったアプローチに関心が高まってきているが、すべての議論はこのオーツ編年を叩き台としている。

幸いにも、ジョアンと連絡が取れて、なんと彼女が個人的に管理している研究資料のなかにラス・アル・アミヤ出土品もあることが分かった！この機会を活かさぬ手はない。即、イギリスで資料調査を実施することに決める。オーツ博士が管理しているイラク出土のウバイド土器をじっくりと観察し、彼女しか知り得ない貴重な情報や見識を拝聴することも狙いとした。彼女のもとに留学していた大阪学院短期大学の渡辺千香子先生からさまざまなアドバイスを頂戴して出発に備える。

ケンブリッジにて

3月初旬、ロンドンから特急列車でケンブリッジへ。暦の上では春になったとはいえ、駅に降り立つと風はまだ冷たく、厚手のコートを着てきてほっとする。翌朝、フル・イングリッシュ・ブ



図2 マクドナルド研究所

レークファーストで腹ごしらえをして、ケンブリッジ大学へ。道は一本なのに名前がころころ変わり、ヒルズ・ロード、リージェント・ストリート、セント・アンドリュース・ストリートとなったあたりで左折して、目指すダーウィン・カレッジ構内に入る。建物を囲む敷地の広さ、とくに芝の多さに驚く。

マクドナルド研究所に着くと、ジョアンはまだ来ていないとのこと（図2）。グラウンド・フロアのティー・ルームで待たせてもらうことにする。待っている間、何組かのスタッフが降りてきて、挨拶代わりに議論をかわしている（戦わしている？）様を目の当りにして、だんだん心細くなる。いきなり鋭い質問攻めに遭って、貝になってしまわないだろうか…

しばらくして、真っ赤なコートに包まれたジョアンが到着。8年前のシンポジウムで会って以来となるが、どうやらこちらのことは認識してくれていたらしい。差し詰め、ウバイド土器にかじりついている変な東洋人、といった印象なのだろう。「東京からだ大変な長旅ね」「旅は嫌いじゃありませんから」。たわいのない会話でケンブリッジでの資料調査は始まった。

研究所2階にはジョアンが長年手がけてきたテル・ブラク発掘調査団の研究室「テル・ブラク・ルーム」がある。ブラク遺跡は、1937年にマックス・マロワンが発掘に着手し、1976年以降もイギリス隊が調査を継続してきている。同遺跡はウバイド文化の北方拡散における拠点集落であり、後続のウルク・エクспанションでもネットワークの要として機能していた。

「テル・ブラク・ルーム」は10畳程度の小部屋で、中央に作業机、窓側に机やトレース台がならび、至る所に土器の入った箱が積み上げられていた。ありがちな光景に妙に安堵感をおぼえ、さっきまでの心細さも薄れてくる。

途端に、彼女が土器の入った箱を次から次へと作業机の上に並べ始める。事前に何を調べたいのかを伝えてあったので、どうやら用意してくれていたらしい。ここでも日本の先生方のアドバイスが十二分に活かされた。ラス・アル・アミヤ、テル・アバダといったイラク中部の目指す土器資料と対面することが叶う！日本では、こうした遺跡の発掘資料を見ることがまったくできなかったもので、まさに一点一点かじりつきながら慎重に観察を行った。

観察所見として、これら中部イラクのウバイド土器は、北イラク（ティグリス水系）から北東シリア（ハブール水系・バリーフ水系）にかけてのウバイド土器とは異なる様相を呈していた。最も際立つ点は胎土の含有物である。中部イラク地域の資料はいずれも砂粒を主体とする、とてもきめの細かい素地を特徴としている。他方、北イラクから北東シリアにかけての類似資料は、スサ（切り藁）を混ぜた胎土が一般的である。むしろ、中部イラクの資料は、北シリアのユーフ

ラテス川上流域のウバイド土器に近い。後者はスサを含まず、きめの細かい石灰粒を主体としている。

つまり、胎土にスサを混入しないという点において、ユーフラテス川水系を軸とした中部イラクと北シリアとのつながりが浮かび上がってくるのだ。また、一部の土器の裏面において、両地域に共通する特異な調整痕も観察することができたのは、予想外の収穫であった。

ジョアン自身は、近々はじまるブラクの発掘調査の準備で多忙をきわめていた。聞いた所では、調査資金の調達にとても苦労していて、イギリスから大金をシリアに持ち出すこと自体が非常にやっかいな事態（ローンダリング疑惑をかけられる？）になってしまいうらしい。そこへ今朝、ワシントンから電話があり、助成金をもらえる目処がついたという。こんな慌ただしい時期に飛び込んで来てしまい、何ともタイミングが悪かった。にもかかわらず、好意的に資料の実見を許してくれた彼女には、唯々感謝である。

結局、まるまる2日間、テル・ブラク・ルームにこもって土器資料を舐めるように観察することができた。これまで、こつこつとウバイド土器の製作技術的な特徴を観察してきた自身の見解をより強固にすることができ、とても充実した資料調査となった。なによりも、中部～南部イラクの発掘資料品（表採資料品ではなく）を直に触って調べられたことが大きい。

資料観察に没頭しながらも、ときおり交わす雑談は息抜きになった。彼女は、機器の扱いをあまり得意としない旧世代の人間らしく、講演会資料をパワーポイントで準備しているときには、たまた私に使い方を尋ねてきたりした。また、日本から持参したデジタル一眼レフを使っていると、とても羨ましがられたりもした。別れ際、写真を撮らせて欲しいと申し出ると、昔イラクで彼女が出会った妙に写真好きの日本人女性の話を聞かされてしまい（釘を刺された？）、ジョアンとのツー・ショットはあきらめる。

自分はもともと食いしん坊であり、旅先では必ず地元の名物料理を食べることを常に行っている。今回は、イングランドの美味しいパイ料理に出会えることを秘かな楽しみにしていた。定石どおり滞在していたホテルの主人から、いくつかの店を推薦してもらった。ただ、これまでの経験から、美味しい店の情報は複数から聞き出すに限る。味の好みは人によってばらばらだからだ。

別れ際、ジョアンにキドニー・パイのお勧めの店はないかと尋ねたところ、さっそく同じフロアの同僚たちに聞き回って一軒のパブを教えてくれた。このパブ「イーグル」で、半世紀ほど昔に大学院生たちが「DNAの構造を見つけたぞ！」と叫んだそうだ（図3）。そんな歴史のある店ならぜひ行ってみたいと思い、店をたずねる。だが残念にも、店員から「パイはランチ・タイムのときだけ」と言われて、あっけなく挫折。結局、ホテルの主人から紹介されていた店でステー



図3 パブ・イーグル



図4 マンチェスター大学

キ・パイをつつく。

マンチェスターにて

ケンブリッジを後にして、次なる目的地マンチェスターへ向かう。ちょうどイングランドの南東から北西へ横断する格好になる。もちろん直行の列車などなく、2回乗り継いで4時間ほどで到着した。

マンチェスターでは、スチュアート・キャンベル博士に面会することになっていた。スチュアートはハラフ文化研究の大家で、とくにハラフ終末からウバイド初頭にかけての情報はだれよりも多く持っている研究者である。ハラフ文化がウバイド文化にどのように継承されていったのか、土器の視点からいろいろ尋ねるつもりでいた。出国前に、

彼のところで学んでいる前田修氏にいろいろ便宜を計ってもらう。

マンチェスター大学は8年ぶりとなる。前回、アッシュボーン・ホールで開かれた「ウルク・シンポジウム」に参加したときは、中心部から離れていたせいもあり、構内の様子とはつかめなかった。今回、改めてマン大のキャンパスを見渡すと、まるで日本のT大学に来たかのような雰囲気包まれる(図4)。区画整備された広い構内、コンクリートむき出しの建物、まばらな人々。研究に没頭するには格好の環境だろう。WEB上からダウンロードした地図を頼りにスチュアートの研究室へ。

彼の研究室の灯は消えており、近くのロビーでしばらく待つ。間もなくすると、髭面長身のスチュアートが現れる。「ウルク・シンポジウム」で会ったときとは違って、本人はかなりリラックスした感じであった。今回の来訪目的などを説明しているうちに、前田氏もやってくる。3人そろったところで「ドムズ・テペ・ルーム」へ案内される。

ドムズ・テペは東南トルコのジェイハン川流域に位置し、紀元前1千年紀頃の城塞遺跡の一部として1946年に発見されていた。1994年にカリフォルニア大学のエリザベス・カーター博士により踏査され、翌年からカリフォルニア大とマンチェスター大との合同調査が継続されてきている。スチュアートはマン大側のトップである。紀元前6~5千年紀のハラフ併行期の居住堆積が確認されている。

「ドムズ・テペ・ルーム」は、上述のブラク・ルームよりもこじんまりとした作業部屋で、前田氏ともう1人(黒曜石の研究者)が共同で使っていた。スチュアートがドムズ・テペで出土した典型的な土器資料を袋から取り出して説明をしてくれる。この遺跡は層位解釈が複雑なため、理解するのに時間を要した。ランチの合間に、持参してきたiBookを使って簡単なプレゼンを行う。

ウバイド土器とハラフ土器に典型的な器面調整の相違点や、ウバイド土器の製作技術上の定義について拙い説明を試みる。

昼食後、ドムズ・テペ・ルームに戻り、ドムズ・テペのウバイド系土器を一通りチェックする。観察所見としては、北シリアのユーフラテス水系のウバイド前期の土器に特徴的な胎土や器面調整を確認することができた。ドムズ・テペの位置するジェイハン水系はユーフラテス水系に近接しているため、こうした類似性は十分に予想できていた。ドムズ・テペのウバイド土器もしくはウバイド系土器は、北東シリアのハブール水系や北イラクのティグリス水系のものとは異なり、近隣のユーフラテス水系の土器と類似した傾向を示している。

同時に、ハラフ終末期にウバイド土器が北シリアに普及していく過程で、いわゆる「赤色土器」が大きな鍵を握っていたのだが、この土器様式が東南アナトリアでも展開していたことも確かめることができた。たいていこの赤色土器は粗めの砂粒が胎土に含まれており、この点においても北シリアのユーフラテス上流域と南東アナトリアのジェイハン流域とのつながりは濃いようだ。やはり、水系単位の地域的文化（筆者は地域圏と称している）が物質文化の広がりを考察するときの大きな手がかりになることを改めて実感した。

夜9時過ぎまでドムズ・テペ・ルームで粘り、前田氏の勧めでインド・カレー街へ繰出すことにした。彼の話だと、夜さんざん飲んだ後に、カレーでしめるのが今どきのマンチェスター流らしい。日本だとラーメンや蕎麦あたりが相場なのに、翌日に胃もたれしてしまわないのだろうか…そんな心配をよそに、われわれが11時過ぎに店を出たときでも、腹を空かした何組ものグループとすれ違った。

翌日、前田氏に街中を案内してもらおう。まずはマン大の博物館に向かう。エジプトのテル・アル・アマルナ遺跡の資料が目立って多かった。海外の博物館を観ていつもながら感じるのだが、余裕のある展示スペースは羨ましい限りである。休日ということもあり家族連れが目立つ。そして、マン大構内を抜けて旧市街へ出る。ロッチデール運河に沿って赤レンガ建物や煙突が残っており、往時の大英帝国の繁栄が偲ばれる（図5）。

マンチェスター新市街のシンボリックなタウン・ホールに寄って、マンチェスター大聖堂へ。ロンドンやケンブリッジと違って、この街で邦人を見かけることはまずなかったのに、ガイドにはちゃんと日本語版が用意されていた。雰囲気のあるステンドグラスは、第二次大戦中にドイツ軍の空襲で破壊された後に作られたらしい。

資料調査の成果

計2週間ほどの短い調査旅行ではあったものの、内容はとても濃く、得るものも大きかった。報告書を読むだけでは伝わってこない研究者の本音を聴く貴重な経験となった。今回の観察調査の最大の成果は、中部



図5 ロッチデール運河

～南イラク、北シリア、南東トルコにまたがる広範な地域に、類似した物質文化がユーフラテス川水系を軸として展開していたという筆者の見解を土器資料で再確認することができたという点である。

古今を問わず、河川は生活の軸線である。ユーフラテス川は、今も昔もメソポタミアの人々の暮らしにおいて不可欠の場を提供してくれている（図6）。とりわけ日常生活に欠かせぬ土器の製作技法で、地域を横断した広範囲な共通性を確かめることができたのは意味深い。工芸品の製作技術という視点に立ったこのような見通しは、都市化の進行する時期におけるユーフラテス水系を軸にした地域的文化的拡散を考える上で大きなヒントになり、今後のビシュリ山系の調査においても少なからず応用できそうだ。

今回の資料調査では、ジョアン・オーツ博士ならびにスチュアート・キャンベル博士のご好意によって、それぞれが管理する貴重な土器資料を観察することが実現した。お二人以外の方々からもさまざまな便宜を頂戴した。ここに記して感謝申し上げたい。



図6 ユーフラテス川（ディル・エッ・ゾール付近）

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.5 2007年1月31日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1国土館大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryuiki/index.html

